

大妻中高 GLOBAL 研究グループ

大妻中学高等学校 生徒主催プロジェクト

第 1 回 活動報告

「あらゆる不平等をなくそう」

みなさんは「不平等」という言葉を聞いて、何が思い浮かべますか？男女格差、貧困などを思い浮かべた方が多いのではないのでしょうか。しかし、世界には数え切れないほどの不平等が存在しており、新たに生まれているものもあります。今回の第 1 回グローバル研究グループでは、世の中であまり認識されていない、隠れた不平等を暴いていくことで、参加者それぞれが新しい発見をし、不平等への理解を深めることを目標に、SDGs ゴール 10 である「人や国の不平等をなくそう」をテーマにしました。当日は、学年を超えたディスカッションとグループプレゼンテーションを通じて、大いに学びを深めることができたと感じております。27 名程度が参加した、とても有意義なイベントとなりましたので、本紙面において、皆様にイベントの様子をご報告いたします。



日時： 2024 年 4 月 2 日
場所： 大妻中高校舎 CALL 室
参加者数： 中 2 から高 3 まで、計 27 名
 中学 12 名、高校 15 名
 （うち高 3 実行委員 8 人）
テーマ： SDGs10「国と人の不平等をなくそう」

このグループを立ち上げたきっかけと思い

第 1 回 Global 研究グループ プロジェクト実行委員長 川上 ゆうか

私は高校 1 年の 3 学期にオーストラリアに学期留学をし、現地に通っていた高校で、International Women's day といった校内イベントや「Poverty（貧困）」に関する授業を体験したり、日常の会話の一部として、友達や家族内で意見を交換したりする機会が多くありました。そのことに刺激を受け、国際課題という全世界共通の課題についてオーストラリアのように気軽に話し合える雰囲気や学内や日本国内で高めたい、と思ったことがこのグループを立ち上げたきっかけです。そして、私だけでは大きなことができなくても、同じように国際課題に興味を持つ仲間たちと協力し、みんなで意見を出し合えば、私たち中高生が変化を生むことができると考え、学内で実行委員、そして参加者を募りました。もちろん、この企画自体は小さい動きではありますが、それでも私たち中高生が自ら企画し、動くことに意義があり、私たち自身が国際課題の議論に参加すること自体が、その課題解決の一つだと感じており、社会への貢献に繋がると思います。今回のプロジェクトを通して、国際課題に対する意識を高めていく他、知識の豊富な先輩生徒たち、柔軟なアイデアを提案できる後輩生徒たちが分け隔てなく交流し、一つの活動をできたことをうれしく思います。



イベントの流れと様子

Session 1

「不平等マトリックス」を作ろう

第1セッションでは、世の中にある不平等をできるだけ多く、洗い出すことを目的として、「不平等マトリックス」の作成を行いました。まず、「不平等を受けている弱者」を縦軸としてディスカッションを行い、以下の6つの分類に分けました。基本的なものからユニークなものまで、様々な案が出て、私たちが考えているよりも多くも分野で不平等を受けている人がいることが分かりました。次に、「不平等を受けている分野」を横軸に設定をし、参加者たちは、学年をミックスした5、6人のグループに分かれて、議論を進めました。それぞれの弱者が各分野で受けている不平等は何かを話し合い、関連するデータやファクトなどをポストイットに書き出し、それぞれのグループが表を作りました。



縦軸： 不平等を受けている弱者	横軸： 不平等が生じている分野
子ども ジェンダーに関連する弱者（女性、LGBTQ+） 異文化や外国の人々（移民、難民、外国人） 障がい者 高齢者 その他（ベジタリアン、前科者、etc.）	文化、社会生活 経済、労働 教育 健康、福祉、衛生 その他

その後、各グループの意見をもとに全体で大きな模造紙にポストイットを貼っていき、1つの表を完成させました。参加者が色々な弱者の立場に立って、不平等の洗い出しに協力してくれたおかげで、全体で140個もの不平等が書き起こされました。ここまで多くの不平等が出てくるとは私自身も予想しておらず、「不平等」という問題の複雑性を改めて認識し、新たな発見にあふれていました。グループや全体の知識を使い、様々な視点から課題を見つめることで、参加者それぞれが個人だけでは考えつかなかったような不平等の発見があり、より広い意味での格差を認識するきっかけになりました。



グローバル教育部の掲示板で全校生徒にも共有しました。

第2セッションでは、参加者を再度シャッフルして、新しいグループに分かれました。セッション 1 で洗い出した「不平等」から、グループごとに興味のあるテーマを決めてもらい、グループリサーチを行い、最後にはプレゼンテーションを行いました。

各グループの選んだテーマ

グループ 1	子どもの教育
グループ 2	ベジタリアン対応
グループ 3	育休、産休
グループ 4	障がい者の教育と仕事



グループディスカッションの流れ

- Step 1: 何が起きているのか? — 課題の説明、現状の分析
 Step 2: なぜそれが起きているのか? — 原因の分析
 Step 3: どう解決できるのか? — すでに行われている取り組みの分析
 Step 4: 私たちからの提言 — 4つの視点から
- ・グローバル（国連での取り組み等）
 - ・ナショナル（国ごとが行う政策等）
 - ・ローカル（企業や学校、組織が行う取り組み）
 - ・パーソナル（個人ができること）



各グループ、限られた時間の中でリサーチをし、データや例などを効果的に利用しながら、プレゼンテーションを完成させました。どのような課題にも、何かしら取り組める解決策がある事を、他国との比較や、原因の細かい分析などを通じてより深く課題を理解することができました。高校生がリードしつつ、グループ内で役割を分担し、分かりやすい発表をつくり上げました。

～「不平等マトリックス」と記事まとめ QR ～

不平等マトリックス

みんなで作り上げたマトリックスの PDF 版です。どの弱者がどの分野でどのような不平等を受けているのか、参加者の意見をまとめました。



記事セクション

高校生実行委員メンバーがセレクトしたテーマ、不平等に関連するネットのニュース記事です。知識を深めたり、新しい視点から国際課題について学んだりするのに活用して頂くことを目的に作成しました。



第 1 回 GLOBAL 振り返り

参加者 中学3年 早川 碧

私は今回のプロジェクトに参加し、活動内に挙げられた不平等の問題について考えることで、一見どうしようもないように思える問題にも解決策を見いだせることを学びました。また、課題解決を考える過程で固定観念にとらわれず、柔軟に考えることの重要性を再認識できました。一人で参加するのは心細く、友人を誘いましたが、他クラスや他学年の方とも交流でき、貴重な経験ができました。また、事前に参考資料が配信されるなどのサポートもあり、不安なく参加でき、ためになりました。



実行委員メンバー／参加者 高校3年生 廣谷 真央

私は、以前から模擬国連でSDGsや国際問題について議論し、考える機会が多かったため、企画に共感をし、校内の議論を引っ張っていきたいと思い参加しました。また、プロジェクトメンバーの一人として、事前に教育やジェンダーなどのテーマとSDGsに関連したニュースを調べ、多角的な視点から参加者が議論できるように努めました。模擬国連などの学外の会議では、初心者や中学生は上級生に圧倒され、自信を持って話せないこともあります。しかし、今回のグローバル研究会では、高校生がリードしながら、「学年や知識に関係なくみんなが意見を言っていこう！それが課題解決には大切なんだ！」という雰囲気を作り、異なる意見を歓迎し、皆で議論をすることができました。



不平等のない社会を目指して ～ プロジェクト実行委員長 川上 ゆうか

私が不平等という問題の存在を実感したのは、家族で行ったパリ旅行です。あるオープンカフェに入った時に、テラス席がガラガラなのにも関わらず、部屋の隅の地味な席に案内されました。違う席に行きたいと説明すると、露骨に嫌な顔をされました。理由としては、アジア人が店の顔にもなりうるテラス席に座ると、店の雰囲気が下がるからなのです。その体験をし、その後もやや憂鬱さの残る旅となりました。人種という、自分には変えようもないことが原因で一方的に理不尽な不利益を受ける立場を初めて経験し、不平等という問題の身近さを感じました。もちろんこれは一例にすぎません。世の中には、テラス席で食事ができないどころか、教育を受けられなかったり、働けなかったり、場合によっては命を落とす人たちも大勢います。

「あらゆる不平等をなくそう」を副題にしたこのプロジェクトは、一見すると30人程度の中高生が半日程度ディスカッションをただけに思えるかもしれませんが、私たち中高生が課題意識を持ち、このような企画に参加すること自体が不平等の解決に向けた大きな第一歩です。今まで気づかなかった不平等に気づくこと、その解決策や原因について考えて自分の意見を持つこと、その意見を他の人に共有し、他の人の意見を聞いて、さらに理解を深めることは国際課題の解決に向けて、私たち誰もができる解決策であります。

嬉しいことに、たくさんのフィードバックを参加者から頂き、現在、第2回のプロジェクトを企画しているところです。国際課題への学びに終わりはありません。後輩にもバトンを引き継いでもらい、学びを止めないでほしいと願っています。より多くの生徒が今後もこのGLOBAL研究グループに参加して、新しい発見をしてほしいと思います。